Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児の自己表現に対する保育者の意識

○名嘉典子　　関口準
（ぬるみず幼稚園）　（玉川大学）

Ⅰ．はじめに

幼稚園教育要領に関する調査協力者会議は「幼稚園教育の在り方について（昭和６１年９月３日）」の中で「幼児期の自己表現は造形や音楽等の具体的な活動を通して行われることが多い。このような意味で幼児の個性に即して自己表現する活動が十分確保されるようにすることが大切である。」と述べている。この中では自己を表現する具体的な活動として造形や音楽等があがっているが、「新教育要領における”表現”について（幼児教育年報２６平成２年）」の中で、造形や音楽等の活動は保育者指導型に陥りやすい側面をもち、必ずしも自己表現をする活動として行われて来なかったという指摘もされている。

現行の幼稚園教育要領の中で直接、自己表現という言葉を使用している箇所はない。しかし、「１ねらい（２）感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。」や「３留意事項（３）幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切にし、生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること。」等、自己表現力育成を示唆していると思われる表記がなされている。

そこで現場の保育者の幼児の自己表現に対する実態を知ることが、どのように幼児の自己表現力を育成するのか、援助の在り方はどうか等、幼児の自己表現力育成について、考察をしていく上での基礎と考えられる。本研究は、そのための手掛かりとして幼稚園での保育者の幼児の自己表現に対する意識調査をおこなったものである。

Ⅱ　研究方法

私立幼稚園に勤務する保育者（幼稚園教諭）を対象にアンケート調査をおこなった。

調査用紙配布数：１２８
調査用紙回収数：８４
回　収　率　：６５．６％

Ⅲ　結果と考察

※今回の報告は、調査でおこなった20項目の質問より、特に関係があると思われる8項目を挙げた。

このアンケート調査に回答した保育者の性別は、男性１０名／女性７４名で、年齢構成は２０歳代が７０名／３０歳代が５名／４０歳代が４名／５０歳代が５名であった。保育歴については５年未満が５４名／５年以上１０年未満が１８名／１０年以上が９名となっている。

【1】　昭和６１年に日本保育学会がおこなった「幼児保育の検討に関する調査」の問２０と同じ内容でおこなった。今回の質問は、幼稚園での保育内容で特に重要だと思われるものについて複数回答をしてもらったところ、その他を除く２３項目中で、心身の健全な発達（３８.１％）が最も多く、次いで思いやり（２９.８％）、元気に遊ぶこと、社会性、生活習慣の形成（２７.４％）とつづき個性を伸ばす、友達と仲良く（２０.２％）、自己表現力（１９.０％）という結果になった。昭和６１年の「幼児保育の検討に関する調査」の問２０では上位から、心身の健全な発育（３９.９％）、生活習慣の形成（３１.３％）、元気に遊ぶこと（２９.７％）、社会性（２４.５％）、自主性（２５.０％）、思いやり（２３.１％）、自己表現力（１６.１％）、個性を伸ばすこと（１６.３％）があがっており、順位は異なっているが、今回の結果と類似している。

【4】　多くの幼児が最も自己表現をしていると思われるのはどのようなときかという質問には自由あそびのとき（８１.０％）がほとんどで、次点のごっこあそび（８.３％）と大きな開きがあった。

【6】　自己表現が育つと考えられる保育者の態度はどのようなものかという質問に対して、受容的な態度をとる（４４.０％）、見守る（２６.２％）という項目が多く選択され、保育者自身が積極的に自己表現をする（６.０％）、リードする（４.８％）の選択は上記の２項目に比べ少なかった。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

【7】　自己表現がうまくできない幼児に対して適していると思われる対応については、その子の気持ちを受け止める（９６.７％）、励ます（４５.２％）、見守る（４０.５％）という項目が多く選ばれている。

【9】　保育の中で自己表現を育てる主な機会は何であるか複数回答を求めたところ、自由遊び（７５.０％）次いで、ごっこ遊び（６１.９％）が多く選択された

【10】　幼児の自己表現を抑制しなければならないのは、どのような時かという質問に対しては
危険なとき（９２.９％）が最も多く次いで、わがままなとき（４４.０％）、保育者の話しを聞くとき（４２.９％）、他の幼児が発表しているとき（３２.１％）となっている。

【11】　保育者からみて自己表現が乏しいと感じる幼児の行動で最も目につくものは何かということを自由記述で回答を求めた。その回答を大きく区分すると、表現がうまくできないことで人間関係がうまくいかないことをあげた保育者が最も多く、次いでおとなしく静的な行動をあげた保育者が多かった。また、保育者が幼児の自己表現を捉えるとき、言葉で自分の意志を伝えること、表情や態度だけでも意志が伝わってくること、言葉だけでなくそれに伴った行動が見られることと、幼児の自己表現のとらえ方が大きく３通りに分けられることがわかった。

【20】　幼児の自己表現に対して日頃思っている事を自由記述で答えてもらった。様々な意見のなかに共通している点をまとめると、家庭環境の違いが自己表現の現われ方に影響を与えているが、幼児の自己表現を育てることは集団の中で多くの人と関わってこそできるのだから、幼稚園で自己表現を育てることは大切であるという点である。また、自己表現は劇遊びやごっこ遊びでは育つものでなく、むしろ日常生活で育っていくものと考える保育者の意見もあった。

（２）考察

この調査から言えることを１保育内容についての理解、２自己表現についての理解、３保育者の役割についての理解の３点から述べていく。

１　保育内容についての理解では問１にあるように、心身の健全な発達（３８.１％）、思いやり（２９.８％）、元気に遊ぶこと、生活習慣の形成、社会性（２７.４％）など幼稚園教育の目標（１）健全な心身の基礎を培うようにすることや、（２）自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすることや、幼稚園の基本にある遊びを通しての指導ということに関連する項目が上位にある。また、問４、問９などでもあそびの項目を選択している保育者が多かったことを考えると、幼稚園の基本や目標の記述にあることについては理解が得られているといえるのではないか。

２　自己表現についての質問については、幼児の自己表現を育てることについては８９.３％の保育者が育てる必要があると答え、その他の意見のなかにも育てる必要がないと考えている保育者はなかった。また、幼児が伸び伸びと自己表現している活動や、自己表現を育てる活動には自由遊びやごっこ遊びが上位にあがった。反対に自己表現を抑制するときは、危険なとき（９２.９％）以降は、わがままなとき、保育者の話しを聞くとき、他の幼児が発表しているときなど集団生活でのきまりなどに関する項目であった。自己表現の捉え方については問１１を分析したところ、自己表現と捉えているレベルが、言葉で表現する事、表情を含めて表現する事、行動を起こす事、の大きく３つに分類された。また、幼稚園教育の中で自己表現力が育成されているかという問に対しては肯定的な回答をした保育者は50.0％と半数であった。ここでは、保育者は、自己表現力育成につながる保育を実践しようとしていることが確認できた。しかし、集団のレベルにおいては自己表現力育成に関する対応の困難な面もまた確認できる。

３　幼児の自己表現力を育成についての保育者の役割については、カウンセリングマインドに関する項目が上位に選択されていた。（自己表現が育つと考えられる保育者の態度は受容的な態度をとる、見守る等）問７においても、保育者の共感的、受容的態度を示す項目が上位にあがっている。ここでは、保育者がカウンセリングマインドと言われるような共感的理解や受容的態度を持ち合わせていること、保育者自身の自己表現力が、幼児の自己表現力の育成に関わりがあることを認識していることが確認できた。

今後は、この結果をもとにさらに詳しい研究をおこなっていきたいと考える。

《資料参考文献》

・日本保育学会編　『幼児の表現と保育　-保育学会年報一九八九年版-』フレーベル館　　１９８９
・日本保育学会編　『幼児教育学年報２６』１９９０
・文部省『幼稚園教育指導資料第４集　一人一人に応じる指導』フレーベル館１９９５

NII-Electronic Library Service